



2006.10.1

『繡像小説』の坂下亀太郎「理科遊戯」
 ……神田一三 1
 美華書館名称考(3完) ……樽本照雄 8
 晩清小説作者掃描(捌) ……武 禧12
 『清末小説研究集稿』日本語前言と後記
 ……樽本照雄14
 清末小説から11/13/16 新刊のお知らせ。樽
 本照雄著『漢訳アラビアン・ナイト論集』を発
 行しました。それにともない本誌連載「漢訳アラ
 ビアン・ナイト」の最終部分は掲載を中止しま
 す。単行本に吸収したからです。ご了承ください
 い。本誌次号公開は、本年末を予定していま

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方



『繡像小説』の坂下亀太郎「理科遊戯」

神 田 一 三



小説専門雑誌の『繡像小説』に、毛色
のかわった作品が掲載されている。

日本坂下亀太郎著「理科遊戯」という。
創刊号と第2期にだけ掲載された。それ
も文章の途中で、つまり中断状態で終わ
っているのだ。該誌において、長篇作品
ならば連載になるのが普通である。その

中にあるの掲載中止は目立つ。

日本語表題が「理科遊戯」で、漢訳が
それと同じになっている。遊戯だから小
説雑誌にふさわしい、と思われるかもし
れない。科学を主題とした幻想小説が
『繡像小説』に連載されたことはある。
いわゆるSF (science fiction または fantasy)
だ。しかし、「理科遊戯」は小説ではない。
その内容は、理科についての啓蒙的説明
なのだ。

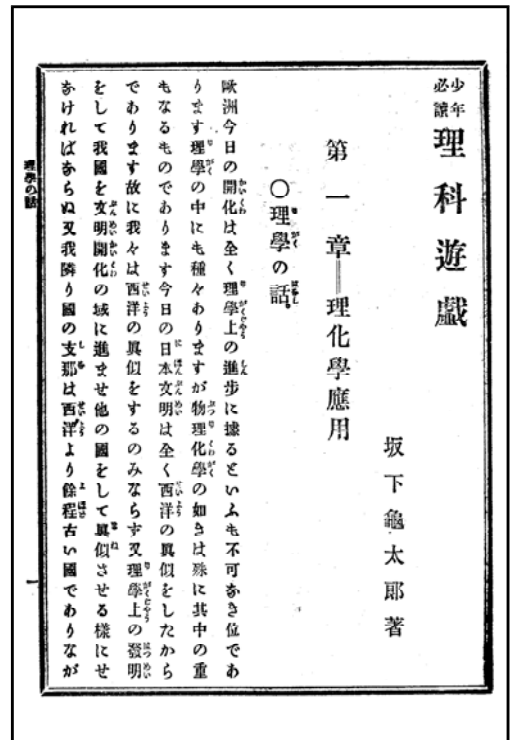
1例をあげよう。「自動汽車」において
説明するのは、遠心力についてである。
原文は、図をそえて遠心力を応用した遊
びを紹介する。ループ状の線路を作り玩
具の馬車(原文のまま。表題と一致しない)
を走らせると、勢いによってループを外
れることがない。1種の遊戯法である。
漢訳では、「如一図」と原文通りに翻訳し
ている。ただし、『繡像小説』はなぜだか



原書に掲載された図を削除する。「繡像(挿し絵)」を売り物にしている雑誌であるにもかかわらずだ。版元の商務印書館は、本文に凸版で図を組み込む技術は持っていたはずだが、それをしていない。該誌の本文は活版で繡像は石印である。印刷物の種類によって使い分けていたのだろうか。いずれにせよ、図のない遊戯法は、言葉だけで説明されても理解するのはむづかしい。

坂下亀太郎の『理科遊戯』は、「理学的工芸的の著書少き」(緒言) 状況を憂え、歴史、政治、小説の上をいく啓蒙書のもりで執筆されたものだ。少年たちにむけて書かれた「理化学的応用の遊戯と工芸の趣味を含みたるもの」という種類の著作である。ゆえに、「通俗教育全書」中の第51編なのだろう。

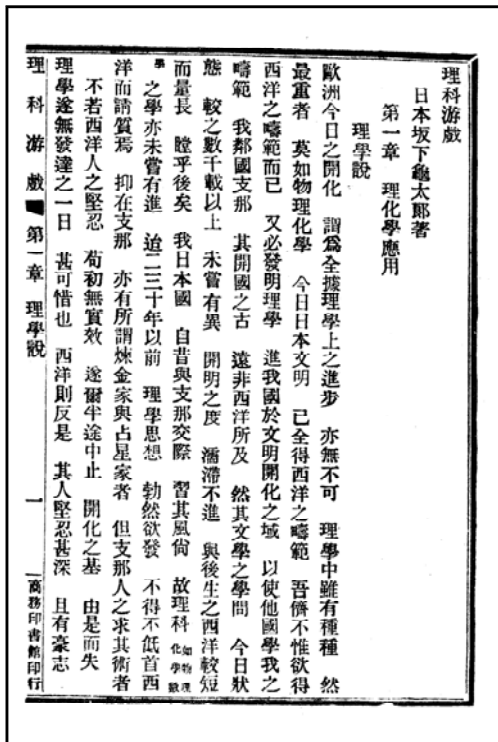
私が見たのは上巻だけだ。あるいは、



下巻は発行されなかったかもしれない。以下のような構成になっている。

坂下亀太郎 『少年必読 理科遊戯』上巻
 東京・博文館 明治廿五(1892)
 年十二月三十日 通俗教育全書第51編。200頁
 緒言
 目次
 第一章 理化学応用
 第二章 数学応用
 第三章 手芸遊戯
 第四章 知慧叢談

坂下亀太郎(1870-1907)*1、新潟の人。号は愛柳だという。博文館に入社し、雑誌『幼年雑誌』などを編集した。編集をしながら「幼年全書」の単行本を数冊書いている。著作の1冊がこの『少年必読



可恐之怪物	恐しき怪物
新式幻灯	新式幻灯
異人之蹣躑	異人の蹣躑
煙上灯	速製ガス灯
幻灯製造法	幻灯製造法
×	奇妙なる燭光
無根之火	根なし火
簡單之水車	簡單なる水車
×	新工夫の水
鷄卵之喜怒	鷄卵の喜怒
×	百色眼鏡
水独楽 (独楽即転盤陀)	水独楽
雲竜之術	雲竜の術
旋風之試験 (中断)	旋風の試験

『理科遊戯』なのだ。

くりかえしになる。原著の意義は、わかる。だが、その漢訳がなぜ『繡像小説』という中国の小説専門雑誌に掲載されなければならないのか。

各章の漢訳と日本語原題を対照しておこう。「×」をつけた文章は、漢訳がなされていない。

日本坂下龜太郎著「理科遊戯」

『繡像小説』第1期癸卯五月初一日

(1903.5.27)

第一章 理化学應用 (原題同じ)

理学説 理学の話

自動汽車 自動汽車

船浮水上 面白き船浮べ

『繡像小説』第2期癸卯五月十五日

(1903.6.10)

巧妙之合図 巧妙なる合図

漢訳は、日本語原書全200頁のうちの33頁でしかない。漢訳のわずかな分量しか『繡像小説』には掲載されなかった。やはり理科の啓蒙的説明が、小説専門雑誌という性格にはあわなかったのが原因だと私は考える。総合雑誌ならば、別の話になるだろう。

それでも掲載されたのには、理由があるはずだ。

私が見るところ、坂下の文章の冒頭部分が『繡像小説』の編集長には必要だった。

日本語原文と漢訳を併記した方が理解しやすい。日本語の変体仮名は書き直し、適宜、句点をつけた。読点は原文のまま(訂正した箇所もある)。ルビは省略。漢訳原文は句読点のかわりに1字を空けている。

理学の話。

欧州今日の開化は全く理学上の進歩に據るといふも不可なき位であります。理学の中にも種々ありますが物理化学の如きは殊に其中の重なるものであります。

理学説

欧州今日之開化 謂為全據理学上之進歩 亦無不可 理學中雖有種種然最重者 莫如物理化学

坂下は、物理化学のふたつをまとめて「理学」と称している。漢訳は、見てのとおり逐語訳といいいい。ヨーロッパが発展しているその根本には、物理化学の進歩があることを強調するのだ。

今日の日本文明は全く西洋の真似をしたからであります。故に我々は西洋の真似をするのみならず又理学上の発明をして我国を文明開化の域に進ませ他の国をして真似させる様にせなければならぬ。

今日日本文明 已全得西洋之疇範
吾儕不惟欲得西洋之疇範而已 又必
發明理学 進我国於文明開化之域
以使他国学我之疇範

ヨーロッパと同じ意味で西洋を使う。西洋に追いつくためには、そのマネをしなければならぬ。日本を文明開化の水準に推し進めるためには、それが必要だという考えだ。追いつけ追い越せである。少年たちを啓蒙する文章だから、主旨を

明確にしている。

又我隣り国の支那は西洋より余程古い国でありながら唯文学の学問のみにて今日の状態は千年二千年も同じ事にて少しも開明の度は進まず却て後から生れた西洋に何事も後れてあります

我鄰国支那 其開国之古 遠非西洋所及 然其文学之学問 今日状態較之数千載以上 未嘗有異 開明之度 濡滯不進 与後生之西洋較短而量長 瞠乎後矣

坂下は、中国批判を展開する。中国にあるのは「文学の学問」だけだという。だから中国は西洋に大きく後れた。ここも日本語原文の逐語訳になっている。省略も加筆もない。『繡像小説』の編集長は、中国の雑誌に中国批判の文章を掲載するにあたり、躊躇していない。

さて又我日本国は余程古昔から支那と交際いたし支那風のみ学ひし故兎角今日となりましても理学(割注: 物理、化学、数学の如き) を学ぶの心進まず二三十年以前までは理学の思想は葉にたくも無い程でありました故西洋人に頭を下けねばならぬ様になりました

我日本国 自昔与支那交際 習其風尚 故理科(割注: 如物理化学数学) 之学亦未嘗有進 迨二三十年以前 理学思想 勃然欲發 不得不低首西

洋而請質焉

「理学の思想は葉にたくも無い程でありました故」という消極的表現を「理学の思想がにわかになり [理学思想 勃然欲発]」とやや積極的とも取れる漢訳にかえた。そのためその後の表現が少し異なることになっている。ただし、日本が古来より学んできた中国が、物理化学数学の方面で頼りにならないという原文の批判は、十分に伝わっている。

勿論支那にも煉金家や占星家がありましたれど、支那人は、西洋人のやうに何処までも遣り通すといふ氣象が無いと見えて煉金煉丹の目的を貫くとか出来ず遂に半途にて立ち消えの姿となり、眞の開化の土台となるべき理学の考を失ひました。

抑在支那 亦有謂煉金家与占星家者
但支那人之求其術者 不若西洋人之堅忍 苟初無实效 遂爾半途中止
開化之基 由是而失 理学遂無發達之一日 甚可惜也

中国人は、物事を探求するのに持続力がない、と坂下は書く。日本語原文の中国人批判は、そのまま翻訳されている。

之に反し西洋にては実に忍耐、勉強、豪志の人が多く蒸気船、電信、汽車、電話、蓄音器其他いろいろの便利の物を發明いたし、今日我々は皆使用いたしております。吾々も大勉強

で理学を学び富国強兵の種を蒔かねばなりません。

西洋則反是 其人堅忍甚深 且有豪志 故能發明蒸気船 電信 汽車 電話 蓄音器 及其他種種便利之物 以為我今日所用 吾儕有鑑於此 安得不抖擞精神 深究理学 以蒔富国強兵之種哉

坂下が強調したのは、「理学を学び富国強兵の種を蒔」くことだった。日本の当時の世情を反映した主張であることはいうまでもない。それをそのまま漢訳した文章が、中国の小説専門誌に掲載されているというわけだ。

私は性来文学の方が嗜好でありまして常々文書詩巻は少しも傍より離しません位でありますけれども能く能く考へて見ますと文学は実に割合に贅沢なる学問で到底理学程著しく国家に効益を与ふることは出来ないと思ひました故に私は自分の嗜好な学問を止して是から皆様と理科の学問を勉強しようと思う則ち一己の私情を割いて国家に有益なる学問を諸君に勧め申します。

余素嗜文学 文書詩巻 常不少離左右 然嘗細思之 文学者乃無用之学 雕虫之技 不若理学之有益於国家也 故余断己之所好 而勉力於理科 尤望世之与余同病者 割一己之私愛 而從事有益於国家之学 是則余之大願也

坂下がここでいう「文学」とは、詩歌小説戯曲などの文芸を指す。だが、中国では、伝統的には学問学芸のことだ。だからこそ「文章の字句を飾る[雕虫之技]」といい「無用之学」に結びつく。日本と中国では意味の差が生じている。結局は、国家に有益な学問として理学あるいは理科を位置づけているのは一致するから、よしとしよう。

つづいて、坂下はひとつのエピソードを紹介する。ハンブルクのブランドという人物が、小便を研究するという「実に笑ふべきの極といわなければなりません」その結果、燐を発見して化学上に一進歩をあたえたという。つまり、「兒戯に等しき企てが却つて今日の如く理学進歩の緒を開いた」といいたいのだ。この部分も原文に忠実な漢訳となっている。ここでは省略し、そのつづきを示す。

只今申上げました通り西洋ではかの煉金家や占星家が仕損ひをしても少しも力を落さず辛抱強く試験をするので目的の物を作ることか出来ぬにせよ、却て是が偶然の助けになりて別に色々の発明をして今迄分からぬ事柄が次第に分明になりだんだん年数を経過するに随ふて学問の味も解り大造な仕業か出来てまゐります、そこで従来^の考が又間違うて居る事を悟り遂に真の考^が出る様になりまする夫れ御覽^マな古への煉金術が色々に変化して今日の化学となり占星

術が其精神を入れ換へて今の天文学となりました

在泰西諸国 之数家者 当其從事此術也 縦有損失 志不少衰 抱辛苦勤試験 務以達其目的 今日不成期以明日 経歴年数 而学問之途日広 大造之業乃成 蓋昨以為是 今悟為非 探索研究 真理始出 理固然也古之煉金術者 变化無窮 即今之化学也 古之占星術者 觀察天象 即今之天文学也

日本語の「従来^の考が又間違うて居る事を悟り」を翻訳して「昨日は是と思つたものが、今日は非であると悟る[昨以為是 今悟為非]」とはどうか。日本語では進歩の方向を強調するのだが、漢訳では混迷への変化になってしまった。翻訳者には、その口調の方がなじんでいたのかもしれない。

固より西洋にも東洋にも煉金とか占星という様な考は最初は共にあつたに違ひかないが唯東洋(日本支那等) では其考を試験する精神が弱くして、之を仕果すことか出来ず為に貴重なる理学思想の発達を妨害いたしました

西洋与東洋 煉金家占星家之思想 固初無少異 惟東洋(支那日本等) 則精神脆弱 思想窒塞 不能窮其所蘊

いうまでもなく、日本語の「東洋」は

範囲が広い。念のために坂下は、「日本支那等」と注釈をつけた。漢語で「東洋」といえば、日本をさす。漢訳者は、坂下の注釈を取り入れ、しかも支那を日本の先にする工夫をつけ加えた。物事を追求する辛抱強さに劣る点では、日本も中国も同じことになる。

西洋では之に反し辛抱強く此考を研究し若し其一人一代にて出来なければ、其子に志を示めして其業をつがせ、其人出来されば又其子に其業をつがせる様に致しました。決して古人に無駄骨を折らせずして理学上の土台を打ち立て遂には今日の如き東西の開化に雲泥の差を生ずる様になりました。

西洋不然 抱其毅然不屈之志 以研究斯学 若非一人一代所能竟也 則示其志於子 使継之 其子又未能竟也 則又示其志於子 使継之 要之不達其所目的不止 於理学上建此基礎 遂成今日之結果 此東西文化所以判若雲泥也

以上が、冒頭部分である。進んだヨーロッパがあり、後れた中国が存在する。日本はその中間にあって、西洋のマネをして追いつかなければならない。坂下の認識は、福沢諭吉『文明論之概略』(1875)から来ているのは明らかだろう。

坂下の考えは、国家に無益の(日本でいう)文学を捨て、富国強兵のため、国家の利益になる物理化学の勉強をしよう、

と少年たちに勧めることだ。小説専門雑誌である『繡像小説』を発行する主旨とは、基本的に相容れない考えであるといわなければならない。

中国批判の部分を読んで心穏やかな中国人読者はいないだろう。しかも、日本人が行なう批判なのだ。それをあえて『繡像小説』に掲載するのには、それなりの理由がある。

中国の読者に、目覚めよ、という意味の警告をあたえる意図があったとしか私には考えられない。日本人が行なう中国批判をそのまま掲載する。自分で書くよりも、坂下の文章を漢訳する方が、衝撃度が強くより効果的に違いない。小説雑誌発刊の主旨とは矛盾していても、『繡像小説』編集長にとっては、なお、掲載を必要とした種類の文章だといえる。

それにしても、小説専門雑誌に理科の啓蒙的文章では、水と油であった。連載が中断される理由である。 ☐

【注】

- 1) 坂下亀太郎については、堀田穰「第11巻解説」(『叢書日本の児童遊戯』第11巻 株式会社クレス出版2004.7.25)によった。坂下の生没年は、「明治三年一月二日生まれ、明治四十年十月二十六日没」だと堀田は書いている(3頁)。明治三年の「一月二日」が旧暦なのか新暦なのかは、説明がないから不明。

美華書館名称考(3 完)

樽 本 照 雄

3 名称の問題点

私の疑問をくりかえし述べておく。

華英校書房、華花聖經書房(花華聖經書房) という名称は、発行元である APMP とは直接につながらないのではないか。美華書館という名称も APMP から離れて大胆に簡略化したかたちではある。

私が漢語名称について覚える違和感は、今から考えれば、それらが APMP の漢訳だと理解していたのが理由だった。

華英校書房から検討する。

華英校書房

もういちど張秀民、韓琦『中国活字印刷史』の説明を思い出してみよう。

『新鑄華英鉛印』の書影を説明して「澳門美国長老会印刷所“華英校書房”印，道光二十四年(1844 年) 」とする(178 頁) 。原書名は *Specimen of the Chinese type belonging to the Chinese Mission of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the U. S. A. , Macao,*

1844 だという記述だ。

「華英校書房」と印刷されているのは否定しようのない事実である。写真を見ればわかる。私は、それを疑っているわけではない。華英校書房が、この漢字見本帳の発行元、すなわち APMP (韓琦の書いている美国長老会印刷所) の漢訳名だと私は理解したため、落ち着いた悪さを感じたのだ。

『新鑄華英鉛印』は、分合活字の見本帳であることはすでに触れた。これをもとにして分合活字を実際に組み合わせた見本帳が別に発行されているという。鈴木広光が「ヨーロッパ人による漢字活字の開発 その歴史と背景」(前出『本と活字の歴史事典』所収) において、それが “ Characters formed by the divisible type belonging to the Chinese Mission of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian church in the United States of America ” だと紹介する(203 頁) 。

掲げられた書影を見れば “ MACAO:/ PRESBYTERIAN MISSION PRESS./1844 ” と書いてある(204 頁) 。これが版元であることは明らかだ。

書名の “ the Chinese Mission of the Board of Foreign Missions of the Presbyterian church in the United States of America ” との関係でいえば、版元が華英校書房だという理解であろう。同じ書影(図 23) に『華英校書房所有分合活字総数見本』と日本語訳がつけられているところからも、私はそう判断した。

PRESBYTERIAN MISSION PRESS は、

日本語では長老派教会印刷所だ。漢語で長老会書館とするならばわかる。これが、なぜ華英校書房になるのだろうか。

華は中国、英は英国というよりも英語を意味するだろう。それにしても漢字の活字見本帳になぜ「英」が必要なのか理解しがたい。アメリカ長老派教会が所有しているというのであれば、アメリカを表わす「美」を挿入したいところだ。

もうひとつ「校書」がある*8。「校書」といえば書籍を校訂するという意味だ。ただし、この単語は具合の悪いことがある。「校書」は、旧時、妓女の別称でもあるからだ。「坊」がつくと妓楼を意味する。華英校書房という文字の組み合わせを読むことのできる中国人は(このように書くのは、当時の識字率は低かったからだが)中国人と英国人を擁する妓楼だと誤解しかねない。あるいは、中英共同経営になるか。いずれにせよキリスト教会とはなじまない命名であると私には感じられる。中国人であればつけるはずもない名称なのである。

どのみち、書籍に見えるのだから華英校書房は存在するのだろう。存在していても、これは APMP とは直接には結びつかないのではないか。私の率直な感想である。

つぎの華花聖經書房(花華聖經書房)は、どうだろうか。

華花聖經書房(花華聖經書房)

英文名は、The Chinese and American Holy Classic Book Establishment だという。マキントッシュは、それに花華聖經書房

と漢字をあてた。しかし、実際に出版されている複数の書籍には華花聖經書房としか表示されていない。現在のところ、これは動かしがたい事実だといえる。

Chinese が華に、American が花に、Holy Classic Book が聖經に、Establishment が書房にそれぞれ該当する。アメリカを意味する花旗国は、俗語だとする辞書もある。たしかに現在は使用しないが、昔は使っていた。聖經は、漢語では聖典を、英語では聖書を意味するから、まことに都合のよい単語だといえる。漢語が、そのまま英語にかさなる。

漢英が重なる例を示せば、商務印書館の英語名称がある。普通は、(the) Commercial Press だと考えられている。しかし、実は、以前には違う表記をしていた。“the Commercial(商務) Press(印) Book(書) Depot(館)”なのである。

宮坂は「美華書館に関する歴史的考察 史料紹介をかねて」において次のように判定する。

マキントッシュの書く「花華」か、それとも逆の「華花」か。

「しかし本論では「華花聖經書房」説をとりたい。それは印刷出版された本の奥付部分にそう印刷されているということと、英語の名称が「Chinese and American」のため、中華の華が先にくるのが自然ではないかという2点の理由によるものである」(84頁)。熊月之も同趣旨のことを書いていた。

熊月之、宮坂の説明は筋が通っている。それにしても、The Chinese and American

Holy Classic Book Establishment とは奇妙な組織ではないか。

私が考えるに、漢語と英語があまりにも一致しすぎている。その発想のもとをさぐれば、まず華花聖經書房という漢語が考案され、それをそのまま英訳したのだと推測できる。

その成立の順序が正しいとすれば、The Chinese and American Holy Classic Book Establishment という存在の不可解さがはつきりする。この名称を持つ組織が別に存在したのだろうか。APMP という正式名称が最初からあるにもかかわらず、なぜ、別の英語表記を必要とするのか。ここがわからない。また、APMP の関係がどうなっているのか、誰も説明しようとはしない。APMP という印刷所の規模は、もともと小さかった。マカオでは印刷工 2 名に植字工が 1 名だった。寧波に移転してそれが植字工 3 名、印刷工 2 名の合計 5 名に増員されたという(范慕韓 77 頁)。小さな印刷所に別組織があるはずもない。だから、不可解だというのだ。

美華書館

出版物からキリスト教関係の印刷所か、と推測する人はいるだろう。また、知識のある人は、知っている。遠山景直『上海』(出版社名不記 1907.2.28) は、「教会堂」の項目に大美国聖經会、長老会、大英聖公会ほかと並べて「美華書館 American Presbyterian Mission Press. 北京路十八号にあり」(210 頁) と書いている。ここでは教会あつかいだ。

美華書館という漢語を見ただけでこれが APMP だとは、普通、気がつかない。たとえば、『上海指南』(商務印書館 宣統元年(1909) 五月初版 / 七月再版) では、「書坊」の項目に商務印書館と一緒に「美華書館 洋書 在北京路十八号」と記載されている。一般出版社と区別をつけるのはむづかしい。

APMP だとはわからないような漢語名称に、わざわざ設定したのではないかと考えもする。

私なりにまとめた結論をいう。

英語表記である APMP を一般の中国人がそのまま発音するはずがない。中国人顧客、あるは教徒読者のために漢語の名称が便宜的に考えだされた。それが、マカオの華英校書房であり、寧波の華花聖經書房(花華聖經書房) である。その当時の主要な出版物に合わせた命名であつたらう。短期間で変更するような名称だから、間に合わせ的な措置だったことを示唆する。これはあくまでも私の想像である。上海に移転する前後において、将来、業務内容が多様化することを見越して漢語表記は美華書館とした。これが名称変更の理由だと考えられる。

以上をまとめた略図を次に掲げる。

上海では顧客から「長老会書館」とよばれていたという。出版物に印刷しているのは、美華書館である。わざわざ中国人用に用意した名称であるにもかかわらず、なぜ、それが使用されなかったのか。

複雑に見えるが、事実は単純だ。当時、上海には、華美書館、華美書局、あるいは

正式名称	漢語名称
1844マカオ APMP	華英校書房
1845寧波 APMP	華花聖經書房 (花華聖經書房)
	The Chinese and American Holy Classic Book Establishment
1860上海 APMP	美華書館 俗称：長老会書館

は華美印書局と称する印刷所が存在したからである。これに加えて上海美華書局というのものもある。いずれも、Methodist Publishing House の漢語名称なのだ。美華書館と、ほとんど区別がつかない。これらとの混同を避けるために漢語の長老会書館を使用したとわかる。

名称問題は、こうしてチャーリー宋についての誤解につながっていく。 ☐

【注】

8) 「校書」の出所として『重校幾書作印集字』があることを思いつく。鈴木が前出論文において、1834年、マラッカの英華書院で印刷された『重校幾書作印集字』A selection of three thousand being the most important in the Chinese language を紹介している(187頁)。漢語表記は、英文の直訳にはなっていない。意識したらしい。複数の書籍(幾書)から収集した漢字3千字に校訂を重ねて(重校)載せた一覧表だ。ゆえに「重校幾書」という。そこから連想して「校書」と短くしたかとも考える。ただし、これは私の推測にすぎない。

『明清小説研究』2006年第1期(総第79期)

2006発行月日不記

進化論与《中国小説史略》...宋克夫、張蔚
梁啓勳与晚清小説界革命.....王学鈞
最新発現的吳趸人佚文.....何宏玲

『清末小説』第29号 予告

英訳「老殘遊記」.....樽本照雄
去粗取精 去偽存眞

中英對照版《老殘遊記》編后

.....許 冬平
劉鐵雲著作十二種試説.....劉 德隆
在社會思想政治劇烈變動的年代里

黃世仲十年南洋生活行踪考

.....顔 廷亮
黃世仲生平考辨二題.....郭 天祥
ゴールドスミス最初の漢訳小説

.....沢本香子
商務印書館の日本人投資者.....樽本照雄
吳趸人談藥辨.....郭長海、郭建鵬
蔣維喬日記中的小説林社史料...樂 偉平
そのほか

『清末小説』第29号は10月頃発行予定

晚清小説作者掃描(捌)

武 禧

(零二九)

知非子

小説創作：《冤獄縁》

知非子：不知《冤獄縁》作者真實姓名。然別號“知非子”者確有其人，材料如下：

陳玉堂《中國近現代人物名號大辭典》p.1098：

1、黃式三(1789-1862)：浙江定海人。字薇香，別號知非子，室名畏軒、求是室。晚傲居(有《傲居集》)，道光間貢生。曾應鄉試，聞母暴卒，歸后不再應舉。其學博綜羣經，尤長於《三禮》。有《易釋》、《尚書啓蒙》、《春秋釋》、《論語后案》、《敘說通》、《詩傳箋考釋》等，多入《傲居遺集》(全書十六卷)。

又：《中國通俗小説總目提要》p.753

2、《販書偶記續篇》卷九·兵家類著錄《左氏兵謀兵法》二卷，清寧都魏禧撰。附《兵法入門集要》三卷，清知非子撰。咸豐十年(1860年)望云草廬刊本。

又：《中國通俗小説總目提要》p.753

3、《(繪圖)第一俠義奇女傳》光緒甲午二十年(1894年)羣玉山房校刊石印本《序》，尾署“光緒二十年仲春之月，知非子書於申江旅次”。

根據所見材料時間排列：

1、黃式三生於1789年，卒於1862年

2、《兵法入門集要》刊於咸豐十年(1860年)

3、《冤獄縁》刊刻於光緒乙酉(1885年)

4、《第一俠義奇女傳·序》撰於光緒二十年(1894年)

1、2、3可能是同一個人。2、3、4可能是同一個人。1、4則不可能是一個人。

因此，筆者以為：

1、作為《冤獄縁》作者的“知非子”是否就是“黃式三”還需考證。

2、《第一俠義奇女傳·序》作者的“知非子”與《冤獄縁》的作者“知非子”是否同一人也無確證。

(零三零)

東璧山房主人

小説創作：《今古奇聞》

東璧山房主人：王寅(1832-1892?)，江蘇上元(今南京)人，字冶梅，別號東璧山房主人。畫家，善畫山水、人物。以畫梅著名。有《冶梅石譜·梅譜·蘭竹譜》。

(零三一)

厘峰慕真山人

小説創作：《青樓夢》

厘峰慕眞山人：俞達（?-1884），一名宗駿，字吟香，室名醉紅軒。江蘇長洲人。中年遍遊各地。與江蘇金匱鄒弢友善。1878年完成《青樓夢》以發揮個人“遊花園，護美人，采芹香，掇巍科，任政事，報親恩，全友誼，敦琴瑟，撫子女，睦親隣，謝繁華，求慕道”的理想”。鄒弢爲之序。然個人中年累於情，比來揚洲夢醒，志在山林。而塵繼羈絆，遽難擺脫。甲申初夏，遽以風亡。著作有《醉紅軒筆記》、《吳中考古錄》、《閑鷗集》、《艷異新編》、《花間棒》等。

（零三二）

醉月山人

小説創作：《狐狸縁》、《三國因》、《海上塵天影》（署名：梁溪司香舊尉編）

醉月山人：鄒弢（1850-1918在世）：字翰飛。號酒丐，或署名梁溪酒丐。別號瘦鶴、味雪主人、花下解人、司想校尉、瀟湘館侍者等。室名：三借廬、戾天樓、虛白齋主等。江蘇金匱人。歷館於上海、蘇州等地。著作有《三借廬筆談》、《戾天樓脞譚》、《瘦鶴隨筆》，翻譯有《斐洲遊記》等。

關於醉月山人的真實姓名，各種文史材料都沒有明確說明，也少有討論者。筆者以上的根據是《中國近現代人物別號大辭典》。由於這一辭典沒有說明這兩者關係的材料，“鄒弢”何時使用過“醉月山人”這一筆名，因此尚不可成爲定論。但是從對鄒弢與俞達的關係，兩個人所處的時代。特別是鄒弢對俞達的了解情況分析，鄒弢寫小説的可能性完全存在。

（零三四）

鳴松居士

小説創作：《三公奇案》

鳴松居士：（未見任何著錄，待考）

（零三五）

都門貪夢道人

小説創作：《永慶升平后傳》、《彭公案》

都門貪夢道人：（未見任何著錄，待考） ㊦

『近代文学研究・留得』第6期（2006.4）が発行されました。劉鉄雲の著作について紹介があります。詳しくは『清末小説』第29号掲載の劉徳隆「劉鐵雲著作十二種試説」をご覧ください。

清末小説から

海塩県政協文史資料委員会、張元濟図書館編

『出版大家張元濟 張元濟研究論文集』上海世紀出版集團、上海・学林出版社2006.1

顧 柏栄 夏粹方先生哀挽録 上海市歴史博物館編『收藏上海』上海世紀出版集團、上海・学林出版社2005.12

肖 吟新 李伯元《遊戲報》与“小報”的来歴 上海市歴史博物館編『收藏上海』上海世紀出版集團、上海・学林出版社2005.12

CATHERINE VANCE YEH（葉凱蒂）

“SHANGHAI LOVE: COURTESANS, INTELLECTURALS, AND ENTERTAINMENT CULTURE, 1850-1910” UNIVERSITY OF WASHINGTON PRESS, 2006

『清末小説研究集稿』
日本語前言と後記

樽本照雄

本稿は、樽本著、陳薇監訳『清末小説研究集稿』(中国・齊魯書社2006)のために執筆した日本語原文である。該書に収録する際、陳氏によって中国語に翻訳された。

前言

本書には、清朝末期の作者、作品、雑誌および出版社に関する論文を収録した。

普通に考えて、日本に、見る価値のある清末小説関係の資料があるとも思えない。ところが、意外なことに貴重な文献のいくつかを、私は日本において発見した。幸運なことだ。

貴重な文献の発見が、長年の問題を解決することに結びつくことがある。

たとえば、『老残遊記』二集を日本で発見することが、劉鉄雲著「老残遊記」の執筆発行に関して存在した長年の疑問を解明するきっかけとなった。

こちらには、別の問題が浮上してくる。すなわち、「老残遊記」を掲載した『繡像

小説』それ自体の発行が遅延していたというのだ。この問題については、当時の新聞を資料として使用し、私なりの考えを提出した。出版遅延に関連して生じたのが、李伯元の「文明小史」にまつわる盗用問題の見直しだ。

『官場現形記』の版本系統を見直すことになったのは、日本で発見した世界繁華報館本『増注官場現形記』が手がかりになった。

「官場現形記」の作者李伯元と吳趸人は、経済特科にどのように関係したのか。それまで不明確であった事実を解明することができたのは、当時の新聞に関連記事を発見したからだ。

阿英の「晚清小説目録」は、権威をもった目録だと誰でもが認める。しかし、ひとつの目録が数十年もの長きにわたって利用できるはずもない。もしそうであるならば、版本について新しい発見がされていないという意味にほかならない。日本で『清末民初小説目録』を編纂しようという気になったのは、自分で納得のいく小説目録が必要だったからだ。目録編纂の作業は、結果として阿英の小説目を点検することにつながった。

『遊戯報』に掲載された周樹人は、本当に魯迅なのだろうか。魯迅の書いた「斯巴達之魂」は、作品として成功しているのか。清末の作家と作品をささえた上海の出版社は、当時の日本の出版社とどのような関わりをもったのだろうか。

というぐあいに、研究対象がひとつの作品から別の作品に、雑誌から出版社へ

と発展していった現在にいたっている。いずれの論文も資料の裏付けを得て立論していることを強調しておきたい。

いくつかの私の指摘は、従来の通説を否定する。本書の最大の特色だといっている。

研究の参考になればさいわいだ。

後 記

私の研究は、劉鉄雲著「老残遊記」について調べることからはじまった。

中国では「無産階級文化大革命」が進行中で、その他の研究分野と同じく清末小説関係の研究論文が発表されることもない。「文革」以前の中国の学界において、清末小説批判があったことは、日本では周知の事実である。批判された清末小説をわざわざ研究対象に選ぶ学生は、当時、いなかった。

清末小説に関する研究資料もとぼしい日本である。日本横浜で発行されていた『新小説』の全冊を所蔵する図書館は、日本には存在しない。ましてや、『繡像小説』全冊など公共機関には、影も形もない(影印本が発行されるのは、1980年代になってからだ)。研究資料が不足していることは明白である。しかし、何を研究するのも自由であるのが日本のよいところだ。興味をしめす人がいないからこそ、私は、清末小説を研究対象にすることにした。

事のおこりは、『繡像小説』の編者問題だった。論争がはじまり、これに関連して「老残遊記」と「文明小史」の盗用問

題がからんできた。学界の大論争に発展した様子は、本書所収の論文に詳しい。

そうこうするうちに、掲載誌である『繡像小説』の発行遅延説が提起される。この発行遅延説は、劉鉄雲と李伯元の盗用問題にも影響をあたえることになった。

一方で、私は、日本で清末小説関係の新資料をいくつか発掘している。『天津日日新聞』の切り抜き本「老残遊記」二集、李伯元の『庚子蕊宮花選』、あるいは世界繁華報館本『増注官場現形記』などは、中国でも存在が確認されていない。それくらい貴重だということができる。これらの書籍を日本で発見したことが、未解決の問題を解決し、また、あらたな問題の提起につながっている。研究の進展に貢献したと考える。

日本で清末小説の目録を作成するなど向こう見ずだといわれてもしかたがない。しかし、創作作品、翻訳作品を網羅した小説目録がなければ、研究が進まないことはあきらかだった。小説目録を編集してみると(樽本照雄編『新編増補清末民初小説目録』済南・齊魯書社2002.4)、有名な阿英の「晚清小説目」には決定的な欠陥があることが判明した。

本書に収録したのは、漢語で発表した論文のいくつかである。

日本語論文を自分で漢訳したものがある。あるいは、最初から漢語で書いて中国、香港、台湾、韓国、日本で発表した。また、他人の手によって漢訳された論文も本書に収録している。全体の3割くらいか。それぞれの文末に訳者の名前と掲

載誌を明記したのは、感謝の気持ちを表わすためだ。さらに、既発表の論文にもとづいて今回あらたに漢語で少数を書き下ろした。全体を点検し、一部を書き改め、資料をつけ加えた箇所もある。

ながめてみれば、最初に書いた漢語論文は、1983年の『光明日報』に掲載されたものだった。すでに20年以上が経過している。当時、利用できる資料は限られていた。初出の雑誌で確認できないものもあったのだ。点検する過程で、初出にあたることができるものは確認しなおした。

すべての論文を読み直してみて驚いたことがある。ある部分については、同じことを繰り返している。その理由は、私の指摘が大多数の研究者の関心を引かないためだ。必然的に繰り返すことになった。

私の興味は、事実を掘り起こして清末小説を研究することにある。

資料をさがしていく過程で、疑問が生じる。資料をみつけることによって、今まで知られていない事柄を白日のもとにさらす。新しい事実がわかれば、状況をより詳細に把握することができる。

作者に関するものであるならば、不明である経歴の一部を明らかにする。翻訳作品であれば、その原作をつきとめる。版本の系統、あるいは作品間の盗用が問題になることもある。雑誌ならば、その発行年月日の謎を解明する。これらの実践結果を公表するために年刊誌『清末小説』、季刊誌『清末小説から』を発行しつ

づけている。

私の研究方法は、こうである。

清末小説に関する事実を資料によって明らかにすることが目的だ。その方法は、できるかぎり資料を集めることにつぎる。矛盾した内容を示す資料ならば、その理由を考えることが問題解決のてがかりになる。清末小説研究には、事実の探索が重要であると考えているからにはほかならない。本書を読んでくださった読者は、理解してくれるだろう。「主義」を持って、最初に設定した結論にむかい資料を取捨選択しながら論文を書くというやり方には、私は、まったく興味がない。それが研究方法として成立するとは、考えてもいないのだ。

現在、私は、翻訳小説に関する調査を続けている。^{コナン・ドイル}科南道爾、「^{アラビアン・ナイト}天方夜譚」、^{ハガード}哈葛徳など、研究文献の少ない分野は、それだけやりがいがあるというものだ。



清末小説から

范伯群、湯哲声、孔慶東著 『20世紀中国通俗文学史』北京・高等教育出版社2006.3

永田圭介 革命家秋瑾を描く『東方』第303号 2006.5.5

熊月之主編 『上海名人名事名物大観』世紀出版集团、上海人民出版社2005.1

松田郁子 呉趼人の悪玉小説に見られるトリックスター性 「発財秘訣」を中心として 『関西大学中国文学会紀

- 要』第27号北岡正子教授退休記念号
2006.3.20
- 竹内 誠 『社会小説 小額』の作者をめく
って 大阪市立大学中国学会『中国
学志』観号(第20号)2005.12.10
- 松浦恆雄 文明戯と夢 大阪市立大学中国学
会『中国学志』観号(第20号)2005.
12.10
- 孟 華 (陳季同『吾国』)序一 陳季同著、
李華川訳『吾国』桂林・広西師範大
学出版社2006.1 陳季同法文著作訳叢
- 李 華川 (陳季同『吾国』)序二 陳季同著、
李華川訳『吾国』桂林・広西師範大
学出版社2006.1 陳季同法文著作訳叢
『晚清一個外交官的文化歷程』北
京大学出版社2004.8
- 張 仕英 従実用主義到“新実証主義”
《官場現形記》在日本の伝播与研究
黄華珍、張仕英主編『知性与創造
- 日中学者の思考』北京・中国社
会科学出版社2005.12
- 李伯元と『中国現在記』 『アジ
ア文化』第28号 2006.4.26
- 汪 家熔 茅盾在商務印書館 『出版史料』
2006年第2期(新総第18期)2006.6.
25
- 錢 南秀 陳季同手稿《学賈吟》及其肖像照
片發見記 『馬尾船政文化研究会会
刊』2004年第1期 2004
- 陳季同著、錢南秀整理『学賈吟』
上海古籍出版社2005.10
- 附録：陳氏家族主要著作 ……錢南秀
心声百感交集 心画神采奕奕 陳季同《学
賈吟》書藝略評 ……沈 巖
後記 ……陳書萍、陳書菁

樽本照雄著

清末小説研究資料叢書9

清末小説研究論

B5判 417頁 限定150部 定価：5,250円

樽本照雄がこの30年間に発表した「清末小説」の「研究」に関する文章を集めました。

1975-1980年

清末小説研究に思うこと/幻の雑誌『新小説』/曾虚白氏のこと/魏紹昌編『孽海花資料』について/魏紹昌氏の李伯元に関する2篇の論文/魏紹昌氏とその著作/研究論文見本帖/魏紹昌氏のこと/翻訳に訳者の姿勢が見える 阿英『晚清小説史』の翻訳を読む/『新小説彙編』のこと

1981-1990年

中国近代文学研究は復活しつつあるか/『訳林』のこと/雑書を掘り起こす/責めないで 天津留学日記 図書館の巻/天津図書館所蔵の呉趺人著作/研究結石/将来がたのしみな中国の清末小説研究/張純氏と『晚清小説研究通信』/劉鉄雲故居訪問日記/『清末民初小説目録』について/阿英の清末小説観 中島利郎「阿英『晚清小説史』の成立」を読んで/陳遼「關於《老残遊記》の一樁公案」を読む/発情継交 中国近代文学研究を日本でやる意味

1991-2000年

史料と研究 / 飯田吉郎編『現代中国文学研究文献目録(増補版)』のこと / アジアが動く国際学会 / 言語に垣根はあっても、研究には国境はない / 中国近代文学国際学術研究会参加雑記 / 勝手に仕切り直しする岡田さんへ / 押しつけられる側の発言 または、岡田さんの研究姿勢 / 画期的な書評 / 掲載誌の価値 / 陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典』について / 中村忠行先生の思い出 / 資料発掘と立論 魏紹昌『晚清四大小説家』 / 済南再会 嚴薇青氏と老残遊記研究 / 劉蕙孫氏のこと / 『相浦泉文庫目録』について / 橋本循記念会第6回「蘆北賞」受賞のことば / 半歩大前進 『中国近代文学大系』史料索引集を読む / 時代を反映する小説目録 『新編清末民初小説目録』のこと / 定価が中途半端である理由 『新編清末民初小説目録』ができるまで / 嚴薇青氏のこと / 中島利郎『晚清小説研叢』について / 「清末民初小説書系」の発行 / 文献をあつかう姿勢 『吳趸人全集』を例として / 劉徳隆『劉鶚散論』序 / 探求書 『和文漢読法』ほか / 本格的翻訳文学研究の出現 郭延礼『中国近代翻訳文学概論』について / 李伯元研究の広がりと深化 王学鈞編『李伯元全集』第5巻の特色 / 『明清小説研究』の清末小説研究 / 発言のあと 「不要輕視小事」のこと(附: 竺慶麟氏の反論) / 『新加坡国立大学中文圖書館藏中国明清通俗小説書目提要』の清末小説部分について / 『中国近代小説目録』の出現 附: 『中国近代小説目録』疑問表 / 抛るべき研究文献 劉大紳「關於老残遊記」の場合 / あるがままの小説年表 『清末民初小説年表』の構想 / 清末小説研究の現状 日本で研究を行なう意味 / 李錫奇『南亭回憶録』のこと / 『中国近現代通俗文学史』の出版予告 / 橋本循記念会第9回「蘆北賞」受賞のことば / 『図画日報』影印版のこと 附: 『図画日報』所載小説目録

2001-2004年

清末翻訳小説研究周辺 英国図書館における文献検索の実例 / 新しい商務印書館研究 呉相『従印刷作坊到出版重鎮』について / 中国人は、ホームズを乾し殺した!? / 忘れられた増注本系『官場現形記』 / 新編増補清末民初小説目録序 / よみがえる『出版史料』 / 大塚秀高氏の記事2篇 『老残遊記』と『官場現形記』に関連して / 周作人漢訳アリ・ババの原本を求めて / 『老残遊記』の底本から回想録まで3題 / 『唐駁蔵書目録』について 清末小説の方面から

樽本照雄著

漢訳アラビアン・ナイト論集

A5判 上製 箱入り 282頁 限定200部 定価: 6,300円

アラビアン・ナイトの漢訳が出現するのは、1900年前後からです。翻訳の歴史は長いということができます。しかし、研究についていうと、その蓄積はそれほどありません。その理由は、簡単なことです。当時の翻訳者が、漢訳するさいに使用した英文原書を特定することができなかったからです。底本を知らなければ翻訳の質を論じることが不可能であることは、理解できるでしょう。ここにアラビアン・ナイトの複雑な出版の歴史が存在します。つまり、最初がフランス語訳、あるいは英語訳だったのをもとにして数多くの改訳本が出版されたのでした。漢訳者は、どの版本を使用したのか、まったく雲をつかむような話です。

本書では、中国におけるアラビアン・ナイト翻訳の歴史をたどります。中国の研究者が明らかにできなかった底本についてできる限りの調査をしたその結果を報告します。

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜8-4-202 樽本照雄方